

## 紙ぶて

二十五年前のその日、地鳴りとともに突き上げるような激しい揺れで目が覚めた。立っていられない。書棚から本が吹っ飛んでくる。テレビをつけても状況はよく分からない。阪神・淡路大震災の震源地から四十キロ以上離れた大阪の自宅でのことである。

横倒しになった高速道路、立方体がそのまま回転したように倒壊したビル。そこかしこから立ち上る煙。毎週、イタリア語講座を開いていた神戸三宮のビルは瓦礫の塊と化した。上空を救助ヘリが音を立てて通り過ぎてゆく。

当時、大阪の大学でイタリア語を教えていた。一月下旬は大学の後期

## 四半世紀前の思い

武田 好

終了が近い。携帯電話はまだあまり普及していない頃だったから、学生に連絡がつかない。教職員は試験や単位、卒業認定について、さまざまに知恵を絞った。クラスの仲間には連絡のない学生の身を案じていた。ボランティアとして、屈強な若者たちは水を背負って、梅田から線路伝いに徒歩で被災地へ入っていった。「先生、仮設にいましたよ」と学生の消息を聞いたとき、込み上げた思いを忘れない。

その冬、今も続く神戸ルミナリエは鎮魂と追悼、街の復興・発展を祈念して始まった。南イタリアの伝統として残る光のアートが神戸の街に輝いた瞬間、皆が一斉にどよめいた。見上げる顔に色とりどりの光を受けて、これから頑張ろうと誓ったのである。（静岡文化芸術大教授）

2020.1.18

2020.1.18

中日新聞（夕刊）P.1